

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第10号
2020年 9月14日
編集・発行 吉成正士

「戦争について考える」第3弾

まだまだ届いてくる、「戦争について考える」みなさんの文章。読めば読むほど、いろんなことを考えさせられます。

僕は原爆のことについて改めて考えて、まったく原爆のことを知れていなかったと気づきました。僕は小学校の頃に原爆のことを習ったので、知っている気になっていました。しかし、原爆の本当の恐ろしさは、いまだに世界に伝わっていません。

また、安倍首相の「非核三原則を堅持し、立場の異なる国々の橋渡しに努め、核なき世界の実現に向け国際社会の取り組みをリードする」という発言に少し腹が立ちました。核なき世界を本当に実現したいのであれば、核禁止条約に参加するべきと思ったからです。日本が過去に苦しんだ原爆をなぜ止めようとしらないのか、僕には分かりません。

僕がもし首相になれたとしたならば、積極的に核禁止条約に参加します。75年前に起きたことは忘れられかけているので、僕たち子どもたちが引き継いで、いつまでも平和で、世界に戦争がなくなるようにしたいと思います。たくさんの人々を苦しめた原爆が二度と世界に落ちないように、次の世代、次の世代へと原爆の話を引き継いでいきたいです。 YD

「知っている気になっていました」というのは、まったく私も同感です。

私の場合は、教員として修学旅行でヒロシマ・ナガサキに生徒を連れて行くなかで、「知ってるつもり」でいたということです。つまり、「仕事として」、必要最低限知っていることを、さも「よく知っている」かのように、子どもたちに話していたということです。

「仕事として」ですから、「私が主体的に知った」というものではありません。だからずっと、ワガコトになっていなかったのに、ワガコトであるかのような顔をして、子どもに向き合っていました。

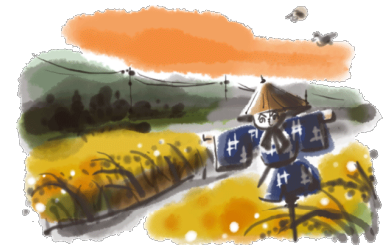
そんな自分が嫌になり、20年ほど前、8月6日のヒロシマに行ってみました。朝8時15分、ヒロシマの地に立ちました。それまで「知ってるつもり」でいた自分が、恥ずかしくなりました。これを知らずして、よくもまあヌケヌケと今まで知ったかぶりしてしゃべってきたもんだと、情けなくなりました。

原爆資料館にしても、一度であの膨大な資料を観ることなんてできません。ある程度観たら、お腹いっぱいになってしまいます。だから、続きをまた観に行くことになります。その年以來、行けるときは毎年行き、

続きを観るようにしています。それでもまだすべてを観きった気がしません。車で行くときもあれば、自転車で行くときもありました。行けば行くほど知らないことが増えてきて、何度行ってもやっぱり、強く胸を打たれます。

人権や平和のことについて学んでいると、よく、「知ってる、分かってる」と思ったり、そういう言葉を聞くことがあります。でもこれはたぶん、間違いです。正しくは、「少しだけ知ってる、分かったような気がする」です。当事者でない、同じ経験もしていない自分が本当に分かるわけがありません。「知ってる、分かってる」というのは、本当は嘘です。それでも知らない自分が悔しい。分からない自分がもどかしい。もっと知りたい。分かりたい。分かり合いたい。それでもその人には絶対になれない…。けどその、分かれようとする気持ちが伝わるから、共に同じ景色が見れるのだと思うのです。

私たちの学年も、そんな学年集団になりたい。「分かってなかった」ということが本当に分かり、分からないことが「分からない」と言える、そんな仲間集団になっていきたい。そんな学校でありたい。そんな世の中、社会にしていきたい。そんな、この国のリーダーであってほしい。そう思います。ぜひ、首相の座、チャレンジしてください！



私は今まで、原爆が落とされたことは知っていたつもりでした。けれど、実際に調べてみると、分かっていたつもりで分からなかったことがありました。

例えば、8月6日の午前8時15分ということは分かっていた。けれど、1945年の8月6日だったということは知りませんでした。他にも原爆症のことについては、私は原爆症にかかるのは、直後か長くても2年くらいだと思っていました。けれど、いざ知ったのは、70年以上経ってから、原爆のことで症状が出たりする人がいるということでした。

戦争の恐ろしさを知って、“戦争がないようにしたいです”と言う人がよくいます。けれど、口だけで言って行動に移さない人がほとんどだと思えます。口だけで言って何もしなかったら、次の戦争はまたすぐに起こってしまうと思えます。そうならないためには、“戦争が起こらないようにします”ではなく、“戦争のことについて知らない人に恐ろしさをできるだけ伝えます”の方が私はい

いと考えます。大きなことは私たちにはできないけれど、戦争のことを学習し、伝えるということはできます。なので、まずは小さいことから、自分なりにどうすれば戦争のない未来をつくることができるのかということを考えることが大切だと思います。

私のこれからの目標は、まずはもっと詳しく戦争について知るということです。その次には、まだ戦争について恐ろしさをあまり知っていない人に伝えるということを目指しています。けれど今は、知ることに集中しようと思います。戦争は、文章を見ただけでも恐ろしかったけれど、まだ恐ろしさが分からない人には、戦艦の上で戦争をしている人の動画を見るのをオススメします。私も実際に見たことがあって、背中に火がついて熱くて海に飛び込んで、苦しくもがく人の映像を見たときには、本当に胸が締めつけられたように苦しかったです。恐くて見たくない、そう思っている人も、まだ恐くないと思っ

MM

中途半端にしか知らない人は、「もうそんな昔のこと…」と、終わった過去のことのよう受け止めがちです。ところが、そうじゃない。今でも75年前の戦争を生きたお年寄りがいる。当時生きてなくても、戦争で父母を亡くし、祖父母を亡くし、親族を亡くし、愛する人を亡くし、口惜し涙を流す人がある。75年経っても、原爆の後遺症で苦しんでいる人がある。後遺症は出てなくても、いつ後遺症が出るかと怯えながら生きている人がある。我が子に、孫に遺伝しないかと不安の中で生きている人がある。そんな自分が差別されないかと、心痛めている人がある。学べば学ぶほど、そんな姿が浮かんできます。そんな人がこの現代にも、ちゃんといるということです。いるのにいないことにはできません。そこをちゃんと見ることです。

口だけにしないこと、大切です。次は行動に移すことです。学習することや伝えることもそうでしょう。でも、前号でも書いたように、身近な戦争である、いじめや差別を許さないということもそうです。思ったことをちゃんと表現するというのもそうです。人権学習が当たり前になり、それぞれの人権が尊重される教室、学校にするということも、平和につながる大切な一歩です。

また、知ることに言え、例えば、戦争もの様々な映画DVDを観る、マンガを読む、本を読むという方法もあります。映画「この世界の片隅に」の作者、この史代(ふみよ)さんの前作、「夕風の街・桜の国」で、ヒロシマで被爆した主人公の女性、皆実(みなみ)が、死に際に回想するシーンが、私は今も忘れられません。

「十年たったけど、原爆を落とした人は、「やったー！また一人殺せた」って、ちゃんと思うてくれとる？」

こう胸の内をつぶやきながら、息を引き取っていきます。なんとも切ないシーンです。人が死んで喜ぶなんて、そんなバカな話はありません。けど、そう思わずにはいられないような人生だったということです。

私は、映画「この世界の片隅に」を観ました。映画で、爆弾で燃え死ぬ人や、逃げてきて命尽きる人とかののちを見て、病氣、寿命、事故以外で普通に生きていた人、死ななくていい人が、死ななくていい理由で命を失っていくんだなと悲しい気持ちになりました。でも昔の人は、そんな中でも頑張って生き抜いたんだなと思うとすごいと思いました。

昔の人は、自分の暮らしが大変でも、他の人や知らない人にまでご飯を分けたり、防空壕と一緒にいれてあげたりしていたのを知って、思いやりの気持ちは今も昔も関係なく、生きていくのに大切で必要な気持ちなんだなと思いました。戦争中でも少しでも楽しく生きられるように工夫したり、少ない食糧や資源の中でも、使い方を工夫して生きていたということが、とてもすごいと思いました。

戦争が終わっても家が壊れたり食糧が不足していたり、ケガをしていたりして、大変な生活だったんだなと思うと、戦争はいいことは一つもないなと思いました。日本は負けてしまったけど、戦争が終わってよかったなと思いました。戦争は二度と繰り返してはダメな歴史だなと思いました。

YH

「困ったときはお互いさま」

助け合いの精神ですね。「競争」ではなく、「共生」。これは、現代でも、いつの時代でも、大切にしていきたい文化です。

互いを尊敬し合いながら、高め合うために競うのなら分かります。ですが、「自分がよければ」というような「競争」で、「アイツより上だ」と勝手に序列をつけ、一人一人が分断されていくような「競争」はどうかと思います。だって、人は一人では生きていけませんから。

みなさんのなかにもありませんか？人と比べて優越感を持ったり、劣等感を持ったり。競う以上、結果は出るし、優劣はつきます。だからといって、「自分は人より優れてるんだ」と、偉そうにするのは違うように思います。「自分は人より劣ってるんだ」と、必要以上に自分を卑下するのも違うように思います。それは「人として」の優劣ではありません。結果として優劣はできても、「人として」は対等であり、互いに尊敬すべき対象ではないでしょうか。そこをきちんと切り分けて考えられないと、心の貧しい人間になってしまいそうです。

今年も日本は大きな自然災害に見舞われました。そのたびに、助け合いの必要性が叫ばれています。私たち人間には知恵があります。その知恵を生かして、「困ってから」ではなく、常に想像力をもって、「いつか」のときのために、「常日頃」から、家庭でも、教室でも、あなたの身の回りでも、小さな「困ったときはお互いさま」を行っていくことではないでしょうか。

